

水文化と上賀茂神社

一 上賀茂神社

関西の方はご存知だと思いますが、上賀茂神社は京都の北にあります。京都駅から北に約一〇キロ、賀茂川の東にあります。いわゆる京都市内の北のはずれにあります。上賀茂神社と申しますが、正式の名前は賀茂別雷（わけいかづち）神社といえます。崇神天皇以前の御鎮座といわれています。現実にはいつ頃に創建されたかよく分かっておりません。平安京が京都にきます時に、北の守りとして皇室の崇敬を受けました。祭としては、京都三大祭の一つの葵祭、今年は雨で上賀茂神社まで来ませんでしたが、昔からの有名な祭です。そ

の他、競馬会、烏相撲などの祭があります。上賀茂神社と下鴨神社の関係は、両方を合わせて上賀社、あるいは賀茂社と総称され一つの神社という扱ひもいたしました。現在は別の神社になっていますが、関連は深い神社です。上賀茂神社の祭神である別雷神の母親（玉依姫命）と外祖父（賀茂建角身命）を祭神とするのが下鴨神社です。

平成六（一九九四）年に上賀茂神社は、「古都京都の文化財」として京都の一七ヶ所の一つとして世界遺産として登録されました。下鴨神社もその一つです。行かれたことのある方も多いと思いますが、一の鳥居を入りますと、大きな広場があり



細殿と立砂

ます。さらに進んで、二の鳥居を入りますと、細殿とその前に立砂があります。古代の神南備(かむなび)信仰の名残を

桜の頃には、大きな紅白の枝垂れ桜がきれいです。社務所の前から北を見るとお椀形をした神山が見られます。ご神体山です。ここに別雷神がご降臨されたといわれています。

二 名前を変える川・明神川

示すものです。この立砂の天辺に松葉がさしてあります。これが、昔は柱を立てたことの名残です。さらに進むと、楼門の前に橋が二つ架けられております。玉橋と片岡橋です。その下を流れるのが御物忌川(おものいみがわ)です。楼門を入りますと本殿があります。

明神川は場所によって名前を変えていきます。しかし、場所によって川がその名前を変えるという昔は当たり前のことでした。建設省が一河川、一名前ということに統一してしまったものから、川が場所によってその名前を変えるということでは珍しい感じをあたえます。明神川は、現在は賀茂川の志久呂橋の下流から水を取り入れておりますが、ここから神社境内に入るまでのところ、鞍馬街道との交差点、終野別れまでを明神川といっております。神社境内に入りませんと御生所(みあれどころ)があり、その横を流れますので御生所川と言っていたようです。さらに、本殿

の西を回って御手洗川といひます。かつては御手洗のために使ったからです。御手洗川は橋殿の手前で本殿の前から流れてきた御物忌川と合流します。御物忌川は現在ゴルフ場の中になつてゐる蟻が池が昔は大きな池だったので、そこからの分流です。橋殿をこえると奈良の小川となります。奈良社の横を流れるからだといふことです。檜の小川とも書かれることもあります。檜の木の林があるからです。神社の方にお聞きしますと奈良の小川が正式だと言われます。ここでは、藤原家隆の歌で有名な夏越の祓が行われます。神社境内を出ますとまた明神川と呼ばれます。これも内川とか大川と呼ばれたとも聞きますが定かではありません。境内を出て東進する辺りから社家町が始まります。社家町は国の重要伝統的建造物群保存地区、いわゆる伝建地区に全国で二七番目に選定されています。こういう明神川ですが、全体を通しては明神川といつておりますが、本当はそ

れぞれの場所でそれぞれの名前を持つております。

上賀茂神社はこのように、川を修景に取り入れた神社と言われますが、私はこれは逆で川の守りとして神社を置いたと考えております。これが今日の話のテーマの一つでもあります。

(1) 夏越の祓

奈良の小川では、毎年六月三十日に夏越の祓が行われます。



夏越の祓

この情景を
歌ったのが
藤原家隆(一
一五八)の
「風そよぐ
ならの小川
の夕暮れ
はみそぎ

ぞ夏の しるしなりける」です。夜八時から橋殿
の上で雅楽の演奏が行われ、橋の上から神職の方
がそれぞれの半年の穢れを移した紙の人形（ひと
がた）を一枚ずつ奈良の小川に流していかれます。
篝火（かがりび）がいくつも焚かれた川面を人形
が流れていく様はなかなか風情のあるものです。
川のある神社でも下鴨神社や城南宮では、それぞ
れまたやり方が違います。

(2)

曲水きょくすいの宴えん

水の流れに関しては、平成六（一九九四）年に皇
太子殿下御成婚などを記念して、曲水の宴が復活
しました。奈良の小川の分流から取り入れた曲水
の流れを渉溪園につくり、そこで行われています。
古代に朝廷で行われた年中行事の一つです。曲水
に臨んで、上流から流されてくる杯が自分の前を
通り過ぎないうちに詩歌をつくり、杯をとりあげ
て酒を飲み、次へ流すという優雅な遊びです。も

ともとは、中国で晋の王羲之が三五三年に蘭亭で
この遊びをしたのが始まりと言われています。今
のようにただ酒を飲んでわいわい騒いでいるの
ではなくて、昔はこのように優雅にお酒を楽しん
だわけです。今でいえば、カラオケとも言えま
しょうか。

ただ、この賀茂の曲水の宴について、ひとつ残
念なことは地元との結びつきがないことです。地
元で歌を詠める方がおられないから仕方がない
ことでもあります。現実にはこのような曲水の宴を
しようと思いませんと、京都では冷泉家からきても
らわなければできません。私は何らかの地元との
結びつき、あるいは社会との接点がほしいと思っ
ています。プロの方でなければなかなかできない
でしょうが、たとえば、和歌を詠む新人にも来て
もらい、新人の登竜門にでもなればと思います。
今の形ですと、上賀茂神社でやろうとどこの神社
でやろうと同じことのわけです。冷泉家がやって

いるという形だけなわけです。何か、社会的な価値を持つてほしいと思っっています。

実は、上賀茂には和歌の文化がありました。江戸末期で有名なのは賀茂季鷹です。現在も季鷹の歌仙堂があります。京都には三大歌仙堂があり、石川丈山の修学院の詩仙堂、高台寺の歌仙堂、この上賀茂の季鷹の歌仙堂です。しかし、現在は建物だけは文化八年（一八一）の創建当時の姿で残されていますが、和歌の方の伝統は失われてしまいました。この建物も実は危ない状況で何とか保存できないかと言っっているのですが、なかなか難しい状況にあります。

三 明神川と賀茂氏

(1) 明神川は人工の川

都市の小川というのは、かつて埋め立てられて道路にされるなどして多くのものが無くなりました。川を大切にしようとするとき、川の歴史を

知っていることが大切です。歴史を知らないために、川が汚れてくると埋めてしまえという形になったと思います。この明神川自身も、かつて暗渠にする計画がありました。そういうこともあって、明神川をもう少し調べたいということもあり、研究を始めたわけです。川を大切にしましょうと言いましても、現実に汚れた川を見ただけでは川を大切にしよう、川を残しておこうなどという気持ちは芽生えないわけです。

米沢市の上杉博物館に国宝になっている上杉本の洛中洛外図屏風があります狩野永徳の作で、天正二年（一五七四）に織田信長が上杉謙信に贈ったと言われています。この洛中洛外図の左隻に、上賀茂神社が描かれており、その側の「しけ」と書かれた屋敷の前を橋がかけられた明神川の流れが描かれています。このように上賀茂の社家町で明神川というのは、上杉本の洛中洛外図屏風でも取り上げられるような大切な景色をつくりだ



流出する葵橋と河合橋

している川であることがわかります。最近、上杉の本の実物大の展示を二時間ほど見ていまして、これが明神川であることに気がつきました。この流れを明神川と指摘している文献は今までのところ知りません。

明神川は社家町を東に流れていますが、明神川

をみた時、地形などからみて東に流れるのはおかしいと分かりました。これを幾つかの方法で証明しましたが、その内の一つだけ示します。京都は、昭和一〇年に大雨で鴨川が氾濫しました。四〇幾つの橋の内、三三の橋が流されました。出町のところでは、葵橋や河合橋が流され、三条大橋も流されました。この大雨の時にどこまで浸水したかを見ますと、古くからの地形の通りに段丘になっているところは浸水して、賀茂川や高野川沿いの河川敷などの低いところが浸水しています。上賀茂の社家町で見ますと、明神川が神社の境内を流れ出て南から東に流れを変えるところのすぐ東までは浸水していますが、それより東は浸水しておりません。地形図でみると段丘になっている高いところです。すなわち、浸水する低い所から、浸水しない高い段丘のところに自然の川が流れることはありえないわけです。明神川が人工的に開削された川であると主張する一つの理由で

す。たとえば、宝永二年（一七〇五）の洛中洛外絵図（京都府立資料館蔵）をみますと浸水しているところは、賀茂川の河川敷であることが分かります。社家町は浸水しないところから始まっていきます。永年の経験で、当然賀茂川が氾濫しても浸水しないところから家を建てているわけです。浸水しない東の社家町の方向に明神川が自然に流れることはありえませんが、昨年、上賀茂小学校で享保三年（一七一八）の古絵図が見つかりました。神社と市原村との領地の合意絵図で、絵師によって描かれたもので、正確に詳細に描かれています。これを見ますと、明神川と賀茂川の接続地点には樋門が描かれています。自然の川でしたら樋門で水を止めることはできません。これからも明神川が人工の川であることがわかります。寛政五年（一七九三）の上賀茂六郷井手口之図（梅辻家文書）でも、同様に樋門が描かれています。

(2) 明神川の開削

明神川は誰が、いつ頃、何のために開削したのが問題となります。古文書を探したのですが、今のところ見つかりません。自然の川であれば文書はないのが当然ですが、自然の川であることは今、否定しました。そうすると、文書に書きとめられるよりもっと古い時代のことであったのであろうと考えられます。上賀茂のことは、賀茂氏のことを離れては考えられません。また、先住民と賀茂氏との関係のこと、上賀茂地域に定住していくためにはどうあらねばならなかったか、などが問題となります。

「山城国風土記」の逸文が、「釈日本記」（卜部兼方）に引用されています。ここには、賀茂氏についての伝承が書かれています。このような、古い記述、古事記、日本書紀などをどのように考えるかですが、私は誇張して書かれています。基本的な内容は信用できると考えています。最近も

朝日新聞で、皆既日食についての日本書紀の記述は、計算し直したところ実は正しかったという記事(平成一五年(二〇〇三)五月三一日)が出ていました。最近の遺跡の発掘調査などで、このような記紀で書かれていた記述と一致するという事物の発見、記紀で書かれていた史実の場所がここであつたというような事実が二〜三年に一度くらい報道されています。

山城国風土記には、賀茂建角身命が九州の方から来て、大倭の葛木山(大和の葛城山)に住み。さらに、山代(山城)の国の岡田の賀茂を経て賀茂川を遡り、久我の国の北山の基(上賀茂)に鎮まつたと書かれています。大倭の葛木山は、奈良県御所市と推定されています。御所市には鴨都波遺跡があり、鴨都波には鴨都味波八重事代主命神社など三社があり、賀茂氏が大規模に住んでいました。昭和二八年(一九五三)以来、発掘調査がなされており、弥生時代の矢板列、大溝、護岸水路の遺構

が多数発掘されています。自然条件に規制されながら微高地の裾野部分に掘削されています。賀茂氏が農耕用水路の建設ができる農業技術を持つて、今の御所市で繁栄していたことがわかります。この集団から新天地(上賀茂)に移住した賀茂建角身命の一族は、当然、農耕用水路の建設ができる農業技術を持った集団だったといえます。技術を持たずに新天地を求めて出て行くことは考えられません。

一方、上賀茂には賀茂氏が来る以前から、先住民が住んでいたというのが定説です。社家町の東の方に大田神社など数社がありますが、これは上賀茂でも北に山を背負い、南は開けた上賀茂の農耕地帯というところで、上賀茂神社よりずっと良い位置にあります。この大田神社は先住民の神様だと言われています。御鎮座の年代もわかりません。上賀茂神社と祭神も異なり、まったく関係がない天鈿女命(アメノウズメノミコト)です。天

照大神が天の岩戸にお隠れになった時、その前で舞をまつた神様です。

そのような先住民がいる地域に賀茂氏が新たに定住するためには、大きく二つの場合が考えられます。一つは、先住民を追い出すことです。しかし、先住民を追い出したら何をするか。まず、先住民の権威の象徴である大田神社を一番に破壊するはずで、そうでなければ、大田神社を核として、先住民がまた集まる恐れがありますから。しかし大田神社が賀茂氏によっても尊重され現在まで続いていますから、先住民を追い出したとは考えられません。そうすると、賀茂氏は平和的に上賀茂地域に入り込み、地域を支配していったということになります。先住民にとっても賀茂氏を地域に受け入れてプラスになる何かがあったと考えられます。そうでなければ、先住民が賀茂氏を地域に受け入れる理由はないわけです。先住民が、他所から流れてきた賀茂氏をわざわざどう

ぞどうぞと受け入れることは考えられません。自分達が今まで住んでいるところに新たに他所のものが入ってくるのですから。それでは、プラスになる何かとは何であったのかということになります。

上賀茂地域は、高野川と賀茂川に挟まれた三角形の西よりの地域になります。この三角形の地域は、実は水不足のところなのです。特に、東側は水不足の地域で、江戸時代でも水争いがよくあったところです。西側のところは、明神川があるので水が供給されています。明神川が人工の川であるとすると、明神川の開削によってはじめて西側の地域は水不足から開放され、農耕地域とし繁栄することができたわけです。これが、先住民が賀茂氏を地域に受け入れていく理由であったのではないかといえます。明神川が開削されることによって、先住民もプラスになったわけです。そして、技術に優れた賀茂氏が結局、上賀茂地域を支配し

ていったのではないかと考えられます。明神川を開削するなどの農耕技術によって、賀茂氏が先住民にとって代わって上賀茂地域の支配者になつたとしますと、今まで先住民に代わって何故賀茂氏がここの支配者になつたのかが謎になつていますが、この見方をすれば説明はつくわけです。賀茂氏が朝廷の水、氷、薪炭を司る主水司（もいとりのつかさ）であつたように水に関連しての役目をしていたのも無関係ではないと考えられます。昔から水を治めるものが国を治めるのは、中国の禹王の伝説時代からの事実ですから、狭い地域でもそのようなことが言えるのではないかと思います。

(3) 賀茂別雷神

山城国風土記によれば、賀茂建角身命は丹波の神伊可古夜日女を娶り、その生ませる子、玉依日賣、川遊びをしているとき上流より丹塗矢が流れ

来て、これを床に飾りしに、男子を産みき、と書かれています。この男子が後の別雷神なのですが、この男子が成人した時、外祖父である賀茂建角身命は、八尋屋、八戸扉、八腹酒をつくり、神を集めて七日七夜の宴をします。ここで、「八」は多数を意味しているのではないかと考えます。それに対して、「七」は完結しなかつた、すなわち宴は最後まで出来なかつたので八ではなく七と記されているのではないかと思えます。この宴の席で、賀茂建角身命は男子に「汝の父と思わむ人に此の酒を飲ましめよ」と言います。男子は、酒杯を奉げて、屋の甕を穿ちて天に昇りき、と風土記に記されています。

風土記のこの状況をどのように理解するのですが、人類三五〇万年の歴史で父なくして子供は生まれません。それゆえ、賀茂建角身命は日頃から玉依日賣に男子（別雷神）の父親が誰かを尋ねていたはずで、一方、孫の男子は、まさかの

時のために、母親（玉依日賣）から父親の名前を教えられていたとしても不思議はありません。また、指導者である賀茂建角身命の娘に近づけるのは、日頃から支配者の近くにいる高位のものといえます。すなわち、男子の父親は賀茂建角身命と同じ酒宴の輪の中にいます。

外祖父である賀茂建角身命が男子に父親の名前を聞いた状況を想定すると次のような場面が考えられます。何も起こっていない酒宴の席で、父親の名前を聞いても答えるはずがありません。何らかの異様な状況において、その状況を利用して尋ねたと考えられます。すなわち、酒宴も七日目に入り、突然、空が暗くなり激しい豪雨と地面を揺るがせるような雷鳴が轟きました。普通の子供なら怖がって泣き叫ぶ状況です。このような時に聞かれれば、恐怖から本当のことを言うというのではありません。脅して白状させるといえるのは今でも行われる常套手段です。ちょうど、

賀茂建角身命が男子に父親の名前を聞いた時、その屋に落雷が落ち、男子は亡くなりました。この情景を物語りにすれば、山城国風土記になります。離れたところから、落雷をみると魂が天に昇るように見える場合があります。

明神川と別雷神との関係をみると、明神川で農耕の水が確保され、農耕の安定による支配体制の確立と繁栄があり、これを基礎にして孫（別雷神）の成人が祝えたと考えられます。少なくとも賀茂氏が上賀茂地域に来てから三十年位は経過していたのではないのでしょうか。三十年位経ち、孫の年代になれば、移住初期の数々の辛苦が風化しだす時期です。このような状況のもとに、天に昇った孫を賀茂別雷神として祀ったのではないのでしょうか。そうであれば、別雷神を祀りだしたのは、明神川の開削より後になります。すなわち、明神川があり、その守りとして別雷神を祀ったといえます。別雷神が本来は水を司る農耕の守り神で

あつたこととも一致します。

(4) 神社本殿の位置

現在の本殿は、もともと神山を仰ぐ遙拝殿として建てられたのに違いない、と座田司氏元宮司は言っておられます。しかし、現在の本殿の位置からは神山は見えません。神山が直接見られなくても良いとも言われますが、やはり不自然です。なぜなら、西に少しずらせば、秀麗な神山が真北に見えるのです。ただし、賀茂川の河川敷になつてしまします。それで、かつて本殿が出来るまでは賀茂川の河川敷であつても、神山が真北に見える適当な場所で祭祀をおこなつていたのではとの説もあります。現在の本殿は、南にすぐ山があり望ましい場所とはいえません。もつと南が開けた場所の方が適当です。神社の参道とも奇妙にずれていますし、そのずれも大きいです。このようなことを考えると、かつては賀茂川の河川敷であつ

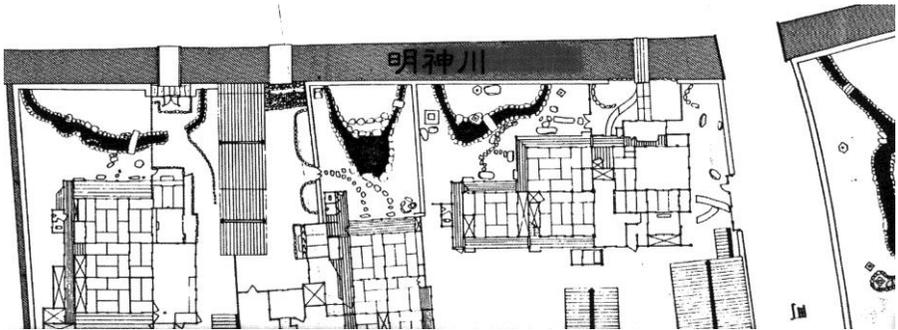
ても神山が真北に見える場所で祭祀をおこなつていたが、本殿をつくるに当つて近くの安全な場所に移動させたことが考えられます。さらに、まったく別の場所ではなく、この近辺にこだわるのは、賀茂川の取り入れ口から下流までで、明神川の最も弱点になつている場所が現在の本殿のすぐ北なのです。ここは、東の山から降り下りてくる雨の流れが最も強い場所です。南北に流れる明神川はしばしば崩壊するところです。そして、そのすぐ南の少し小高いところに本殿があるわけです。これらのことを総合して考えますと、確かに現在の本殿は遙拝殿の意味も当然あつたと思いますが、明神川の守りとして本殿の位置を現在の場所にしたということが考えられます。

(5) 明神川と社家の遣水

社家（しやけ）というのは、神社の神職を世襲制で代々受けついで家筋をいいます。神社に出仕

する社家があつて、その神社の神領があり、その神領を小作として農家が稲作をやっているという関係になります。ところで、神社境内を南に出る流れる明神川が酒殿橋を過ぎると東に流れを変え低い尾根を越えますが、この辺りに浸水の危険のないところから社家町が始まります。社家町は遅くとも一五世紀中頃には形成されたというのが定説です。

社家はこの地域にわりに広く存在していますが、この社家町が始まる明神川の南に沿ったこの社家だけが、遣水の庭を屋敷の北側に持っています。遣水とは水の流れて、池ではないのです。ここの明神川沿いの社家以外の社家は、水の流れが取り入れられるところでは池の庭園を南に持っています。遣水にはなっていない。また、もう少し調べなければなりません。日本では北側には池や水の流れは造らない、池などは基本的には南側に作るものと聞いています。湿気な



社家庭園の鍵水構造

(やりみず：寝殿造りの庭園などに水を導きいれて流れるようにしたもの)

どの問題からだと思いません。すなわち、明神川沿いのこの社家だけ、通常でない造りになっていることになりました。当然、そこには何らかの理由があったはずです。この点について、私はこの辺りの社家は明神川の水を管理(監視)していたのではないかと考えています。遣水ですと、すぐに水の異変がわかります。明神川がすぐ外を流れているのではないかと言われるかもしれませんが、今なら懐中電灯と傘で家の外でも苦労なく見ることが出来ますが、昔はそうはいきません。風が強ければロウソクの火も消えてしまいます。遣水であれば、建物の中から見る事が出来ます。

明神川の下流の本郷地域は、上賀茂にとつて重要な農耕地域です。そして、稲作への悪影響は、神社の存立に影響します。神社(社家)として、生産の基盤である明神川を守ることは大切な事柄です。また、明神川の最も弱点の所のすぐ南に本殿がありますから、明神川の異変は本殿の異変に

も繋がるわけです。社家として明神川を守らない、あるいは管理(監視)をしないのは考えられないことで、農家任せにしていたとは考えられません。賀茂川からの取り入れ口近くから、蟻が池一帯の水源も神社の境内ですし、明治になるまでは賀茂川の源流である貴船社も上賀茂神社の摂社にして支配していました。明神川あるいは水について強い関心を持ち、また実効支配していたわけです。この神社、そしてそのいわば領主である社家が明神川を管理しないのは考えられないことなわけです。

この考えを水の専門家に話しますと解かると言ってくれます。水と言うのは必ず管理をするものだと言われます。普通の人は首をひねります。そこで、別の例を出します。角倉了以(一五五四〜一六一四)です。晩年は嵐山の大悲閣にありました。ここは、大堰川を見下ろす位置にあります。水を見ていたと言うよりか、舟運を見ていたので

しようが、実務に携わらなくなっても、決して人任せではないわけです。それから、高瀬川の最上流にある角倉別邸ですが、鴨川から取り入れた水は、まずここを遣水の流れとして庭園を流れ、その後、高瀬川の最初、すなわち一の船入りになります。やはり、必ず水の管理をやっているわけです。

そこで、ここまでの話をまとめますと以下のようになります。

- ① 明神川は人工の川である。地形からみても、昭和一〇年の浸水状況からみても水は東には流れない。古絵図を見ても、賀茂川からの取り入れ口には樋門があり、人工の川であることを示している。
- ② 明神川は賀茂氏が造った農耕用水路である。
- ③ 賀茂氏は明神川によって上賀茂の支配権を掌握した。

④ 明神川の守りとして天に昇った別雷神を祀

った。

⑤ すなわち、上賀茂神社は明神川の守護のためであった。

⑥ 明神川沿いの社家庭園の遣水は明神川の管理(監視)のためである。

(6) 神社の意義の変化

何故、このように今は言わないかについては、神社の意義、性格が変わったことに原因があると考えられます。最初、上賀茂神社は賀茂氏の氏神で、水を司り明神川を守る農耕神でありました。その上賀茂神社が平安京遷都の時、平安京の北の守りと位置づけられて朝廷からの厚い崇敬を受けるようになりました。賀茂氏を守る神から国を鎮護する神へとより大きな意義をもつようになったわけです。江戸時代では、上賀茂神社は朝廷、貴族、武士階級しかお参りできなくなっていました。庶民は大田神社にお参りしました。このよう

に、国を鎮護する神となって、かつての賀茂氏の氏神で水を司り、明神川を守るという初期の意味が薄れてしまいました。護岸などの農耕技術の発達は、明神川を守るという意味をさらに減少させたといえます。さらに明治になって、神社は上知令で農耕関係の権利を全て失い、明神川との利害関係もなくなりました。神社と明神川との関係が希薄になってしまいました。明神川はたんに本殿の周囲を流れる神社の修景、あるいは葵祭の斎王代の禊、夏越の祓などの祭の場としての意義のみが続いているわけです。しかし、神社の祭事の分割以上は、今も農事に関係するといわれています。以上のことから、本来、神社は明神川の守り、とくに本殿は明神川の最弱点部分の守りとして位置づけられていたと考えるもおかしくないわけです。

(7) 上賀茂社家町と明神川

社家町は今では全国的にも珍しく、上賀茂の社家町は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。さらにその周辺地区は京都市界わい景観整備地区に指定されています。社家町を歩きますと、明神川は社家町の景観にとつてなくてはならないものであることがわかります。しかし、この明神川も一時は暗渠にする計画がありました。昭和一四年に暗渠にして道路にする計画が都市計画で決定されました。



社家町と明神川

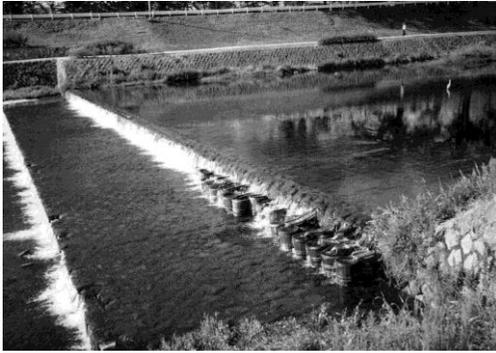
そして、昭和三十年代にはその実現の要望があり、

また一方で反対がありました。道路の要望は、小学校に通う児童の交通安全からでたものです。明神川に接する藤木通りは府道になっており交通量の多いところだからです。反対は、明神川が農業用水として使われていますから、その維持管理の面からのものでした。今の文化的な景観を維持するということではなかったのです。そして、時代も変わり、昨年(平成一四年)に、伝建地区に選定されているなど文化的な地区については景観面からという理由で、都市計画での道路計画が廃止になりました。もし、暗渠のなっていれば、明神川沿いの社家の遣水もみんな無くなってしまうところでした。

何が大切かは時代によって変わります。しかし、時代の風潮に流されずに、文化を文化として気づくかどうか。効率優先をどこまで抑えることができるのか。文化の保全・継承の難しさが理解でき

るところです。

水や川について、我々は過去にどのような対処してきたでしょうか。昭和三十年代頃から、生活の向上にともなうて、川は生活雑排水の流入で汚濁しました。流れの停滞でヘドロと悪臭が発生しました。京都では堀川が典型的な例です。苦情が頻発しました。この頃からの自動車の普及・便利さの追求と相まって、川の埋め立てと道路の拡幅が行われました。公共下水道の整備などが待てなかったこともあり、川をきれいにするという本質的な解決を計らずに、問題を隠すことによって解決しました。これが社会の要求でもあったわけです。現在、これによって何を得て、何を失ったのか。ちゃんと整理をするべきではないかと考えます。京都でみますと、鴨川の西では、今出川、小川、有栖川、これらはすべて現在はありません。全部埋められてしまいました。勿論、すべて戦後と言うわけではありません。川と言うのはすぐ埋



賀茂川に漬けられたスグキの桶

め立てられる対象になってしまいました。

次のようなことも考えなければなりません。賀茂川に上賀茂名産のスグキの桶を浸けています。一年間置いておいて、隙間の空いた桶を水に浸して隙間を塞ぐわけです。昭和四四年頃まで行われていましたが、賀茂川の水が赤い色、青い色に染まって流れるようになり、あんな汚い水でと言う

ことになりや
られなくなっ
ていました。
それが公共下
水道も整備さ
れたことも効
果があったと
思います、
賀茂川の水も
徐々にきれい
になり平成九

年に再び復活したのをたまたま見つけました。バスに乗っておりまして、これを見つけてスグキの桶がまた賀茂川に浸けられるようになった。賀茂川もここまですぐに再びきれいになったと嬉しくなりました。すぐにバスを降りて写真を撮りました。このことを地元で話しましたところ、実はそうではないのです、と言われました。この頃の若いお母さん方は食べ物を作る桶を賀茂川に浸けて非衛生なことをしていると非難されるとのことでした。これを聞きまして愕然としました。しかし考えてみますと、私くらいの年のものは、川は元々きれいだった、それが一時汚れたが、再びきれいになってきた、と考えるわけです。ところが、川が汚い時に小さい時を過ごした若い人達は、川は元々汚いものであるが、それがたまたまきれいになったけれど、川は本質的には汚いもの、と考えるわけです。これからは、川もきれいになってよい方向にいくとは思いますが、このように基本

的な考え方の違いも生じてきていることも認識しておかなければなりません。

賀茂川はこのようにきれいになつてきていますが、この賀茂川から取水している明神川は、常に賀茂川より水が汚れています。ここは分流式の下水道で、雨水と汚水を別けておりますが、明神川は雨水管の役割りをしております。すなわち、ここには別個に雨水管は敷設されておりません。ところが、露天の生コン工場があり、夕方に設備を洗いますと、その洗浄水が側溝を通じて明神川に流れ込みます。ある時には、セメントの白い跡が社家町の石垣に付着するということもありました。あれは何ですかと地元の方に聞かれるのですが、事実を言うわけにもいきませんので、一度、明神川の上流まで歩いて原因があるかみて下さいとお話するわけです。それから、上流にあります厩舎の床洗浄で馬のし尿などが流れ込みます。すぐ下流の方は、夕方になると水が臭いと言って

おられます。その他、洗車排水も流れ込みます。田圃の泥も流れ込みます。農薬も流れ込みます。分流式であつても、雨水管にこのような汚水が流れ込むのは下水道の本質的欠陥です。これらについては、何らかの対応がとれないものなのか。結局は賀茂川に入り、汚濁源になっているわけです。このようなことがあるという事実を我々は認識しておかなければならないと思います。

四 大田神社とカキツバタ

(1) 大田の沢のカキツバタ

上賀茂神社の撰社に大田神社があります。今は上賀茂神社の撰社になっておりますが、大田神社は元々は、賀茂氏より古くから上賀茂に住んでおりました先住民の神様といわれております。式内社で格式の高い神社で、その創建の時代も古くてよくわかりません。ここの大田の沢にありますカキツバタは、平安時代の歌人である藤原俊成の

「神山や大田の沢のカキツバタふかきたのみは色にみゆらむ」という歌で有名です。このカキツバタ群落は、昭和一四年に国の天然記念物に指定されています。

我々とカキツバタとのかかわりは古く、万葉集の時代から衣を紫に染めるのに使われました。大伴家持は万葉集で「かきつはた 衣(きぬ)に擦りつけ 丈夫(ますらお)の 着襲(きそ)ひ獵する 月は来にけり」と詠んでいます。清少納言(九九六〜一〇〇一)は「枕草子」第八十八段で「すべて紫なるは何も何もめでたくこそあれ、花も糸も紙も。紫の花の中には、かきつばたぞ少し憎き・・・」と述べています。謡曲「杜若」は世阿弥の作とされ、寛正五年(一四六五)に世阿弥の甥の音阿弥によって演じられました。「これこそ三河の国八橋とて杜若の名所にて候へ、さすがにこの杜若は名に負ふ花の名所なれば・・・」です。

(2) 伊勢物語などのカキツバタ

とくに我々がカキツバタで思い浮かべますのは、その基となります伊勢物語の第九段で、「もとよりもする人ひとりふたりして、もろともにゆきけり。みちしれる人もなくて、まどひゆきけり。三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこ(を)やつはしといふ事は、水のくもでにながれわかれて、木八(つ)わたせるによりてなむ、八橋とはいゑる。そのさは(澤)のほとりに、木景(かげ)にを(お)りみて、かれいみ(ひ)くひけり。そのさはに、かきつばた、いとおもしろく、さきたり。それをみて、京いとこひしくおぼえけり。さりければ、ある人、「かきつばたと云(ふ)いつもじ(五文字)を、く(句)のかしらにすゑて、旅心よめ」といひければ、ひとりの人よめり。

から衣 きつつなれにし つましあれば は
るばるきぬる たびをしぞおもふ

とよめりければ、みな人、かれいみ（ひ）のうゑ
（へ）になみだを（お）としてほとびにけり。」

三河の国八橋に來ましたら、カキツバタがいと
おもしろく咲いており、京を大変恋しく思つた。
京都というのはカキツバタがあちこちによくあ

つたのだと思
われます。池

泉回遊式庭園
などで植えら

れていたの
でしようか。こ

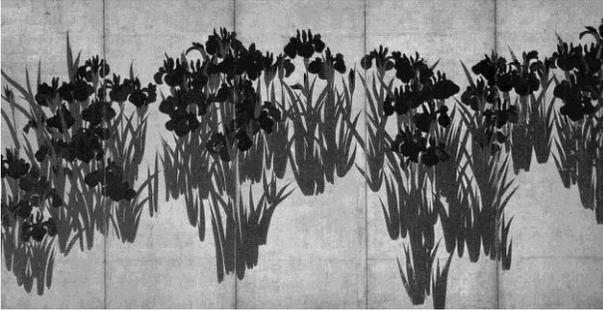
の場面は伊勢
物語図屏風

（大和文華館
蔵）などがあ

ります。

カキツバタ

を描いたもの



尾形光琳「燕子花図屏風」(部分図)

では、尾形光琳の「燕子花（カキツバタ）図屏風」
（根津美術館蔵）が国宝になっており有名です。

この一部分が取り出された絵がてよく出てきま
す。また、このカキツバタは花だけで茎や葉が無
いものがあり、日本画というのは単に自然を写し
たものではなく、自然を借りて美を表現したもの
として説明されています。

カキツバタの花をかたちどった主菓子（京菓）が京都
で五月だけに販売されます。唐衣と名づけられて
います。みなさんは、すぐに伊勢物語を思い浮か
べられてニッコ

リされるのでしよ

うが、わからな
い方には何のこ

とかわかりませ
ん。これが文化

というものでし
よう。



唐衣

(3) 大田の沢のカキツバタの過去と現状

天然記念物で自生地だということで、何もしないでも育つと多くの方は思ってもらえるとおもうのですが、実はそうではないのです。現在では、湧水の水枯れで蒲などの野草が繁茂しています。放っておけばカキツバタは負けてしまい、数年でカキツバタは無くなります。たとえば、昭和三〇年頃には無くなりかけたこともあります。非常に努力で現在の所まで回復しました。今年は雨が多かったのですが、湧水も多く池にも水があります。これも三月に野草を全部抜いて維持しています。平成七年の五月ですと、カキツバタの若葉の間に再び野草が沢山生えています。水もありません。これを放置しますとカキツバタは負けてしまいます。放って置けませんので、水が足りなければ、向かいの井戸から水をもらいます。

何故、池の水が枯れるようになったのかについて二つのことが考えられます。一つは池が小さく

なつて維持できなくなったのかということですが、それで、たとえば宝永二年（一七〇五）の古絵図を見ますが、池の大きさも形も変わっておりません。そうすると、周辺環境の変化、特に上流部分の変化が原因と考えられます。すなわち、上流、周辺部に住宅が建ったり、道路が舗装されたり、さらに公共下水道が整備されたことよつて湧水や雨水が流れ込まなくなった。それによつて地下水位が低下した。これらが原因と考えられます。時代が変われば、荒野になる恐れがあります。自然のものから人が維持しなければならぬ文化になつてしまいました。

そこで、下水道ですが、

- ① 下水道は地下水に配慮したことがあるのか。
- ② 下水道が快適な生活環境の整備に重要な役割を果たしたことは事実です。

③ しかし一方で、下水道は地域のこまやかな環境に配慮したことがあるのか。地域の繊細な

環境を破壊したのではないだろうか。地下水の分断、井戸枯れ、河川の汚濁（合流式下水道の越流堰からの生活排水（し尿など）の流出）、河川の水量減少など。

④ 下水道は現代の十字軍だったのか。

⑤ 得たことも大きかったが、失ったことも大きかったのではないだろうか。

⑥ 果たしてこれは、止むを得ない犠牲だったのか、無配慮の犠牲だったのか。

⑦ 地域にやさしい下水道は夢であろうか。

一月下旬になりますと、上賀茂の農家はスグキの生産の季節です。上賀茂の特産であるスグキの桶を洗っています。これも地下水だから出来るのです。水道水では冷たくてできません。宇治上神社には、宇治七名水の唯一残っております。桐原水があります。これは湧水です。このような湧水を我々は決して枯れさせてはならないわけです。昭和五六年の東京都のデータで、少し古いで

すが、下水管へ流入する地下水の量が、たとえば三河島処理区であれば、汚水全量の四九%となっています。すなわち、約半分は無駄に地下水を流入させて、わざわざ汚してそれを再度処理してきれいにしているわけです。それでなくても、地下水を無駄にしているわけです。その後、下水道が地下水のことを考えるようになったのかは知りません。

下鴨の社家の池ですが、昭和一〇年以前は足元まで水がありました。それが平成一四年では地面より六、七m水面が下になってしまいました。昭和一〇年の大雨による鴨川の氾濫から、洪水対策のために鴨川を掘り下げたことも原因ですが、下水道なども少なからず原因となっていると考えられます。しかし、下水道を整備したら必ず地下水位が低くなるとは限りません。妙心寺の蟠桃院では、今でも地面から四〇センチ程度のところに水面があります。ここまで、地下水水位があつたの

で感激しました。

阪神淡路大震災で、水が無かったので燃えるにまかせなければならなかったことも忘れてはならないことです。しかし、西宮などは地下水の豊富なところでしたからすぐさま井戸を開放して皆の利用に供したところもあります。非常に役立つたということで、このようなことから地下水を見直さなければなりません。下水道が地下水に配慮してくれることを希望する次第です。

五 上賀茂地域の文化の保全・継承と環境保全に向けて

最後に、私が上賀茂で行っている活動ですが、その理念は次のようなことにあります。

- ① 地元の人が地元の事物への自覚と正しい認識を持たなければ、地元の文化の保全・継承も環境保全もできない。
- ② さらに、社会の理解と認識を深める努力が必

要である。

- ③ 放っておいては（無関心では）、文化も環境も守れない。

そこで、具体的には次のようなことを行っています。

(1) 明神川の川底低下の修復

明神川の川底の低下が石積の崩壊を招いたり、遣水にもヘドロが溜まったり、あるいは遣水に水が流れなくなりだしました。早急な修復が必要でした。しかし、地元には多くには動きは無かったので、平成一〇年から地元働きかけて、五年程の期間がかかりました。平成一四年には毎日新聞が川底の修復の必要なことについて、明神川の保全・整備を訴えるという私の意見を取り上げてくれました。このことも効果があったと思いますが、今年（平成一五年）の三月に、京都市が砂利を入れて修復してくれました。地元のことは地元が中心

になって進めなければならないということ、私
はあくまでもお手伝いだとして行いましたので
時間がかかりました。誰かが勝手にやってくれた
では後の保全に繋がらないからです。地元の方も
喜んでくれました、今回のことで、皆で協力して
いけば物事を実現できるという希望を地元の方
に持ってもらうことができたのではないかと思
います。これを今後の地域の活性化・環境保全に
つなぎたいと考えています。

(2) 小学生の社家と明神川の見学会

「落書きに泣く社家の土塀」という記事が京都
新聞に大きく掲載され、社会問題にもなりました。
全てが子供の悪戯というわけではありませんが、
子供の悪戯も少なからずあります。これは、子供
たちが社家の事を知らないからだと思えます。ま
た、地元には子供たちが悪戯をすると、子供たち
を排除する傾向もあることがわかりました。これ

は望ましいことではありません。むしろ、子供た
ちを地域に取り込んで、社家も見学し、歴史も知
れば、子供たちは自分の見学させてもらったとこ
ろに落書きなど悪戯はしないし、小さい頃に社家
町について思い出をつくってもらうことが、将来



社家と明神川の見学会

の社家町の環境保全にも繋がるかと考えてはじめてました。最初は地元からの反発もありましたが、やっとな理解が得られるようになってきました。地域の将来を担う子供たちに地域の文化を知ってもらわなければならないと説明を繰り返していきます。

(3) 社家住宅の特別公開

社家について一般社会の理解を得るために、昨年はじめて、社家の梅辻家（京都市指定文化財）の協力を得て、一日だけ特別公開をいたしました。二百年以上経っている古い家の維持は、実は大変なのです。見てもらうと、このことがわかります。公開の準備が大変でしたが、約一七〇人の方に来ていただき好評でした。地域に新しい動きを作り出す切っ掛けになると思います。

(4) 日本泳法の小学校での模範演技の実施

上賀茂の小池では、いわゆる古式泳法を教えています。古式泳法を教えているところは京都では二ヶ所しかありません。だんだんと日本の泳ぎが忘れられて来ていますが、子供たちに色々な泳ぎのあることを知ってもらい、日本の文化についても体験してもらうためにはじめました。

(5) 上賀茂の生活と文化の記録づくり

千三百年以上の伝統がある上賀茂地域は、都市化の影響を受け出しているとはいえ、まだまだ古い生活習慣や事物が残っています。今のうちに、それらの記録を残そうとしています。今の学生が既に少し前の生活を知らなくなっていることから危機感を持ったことからはじめたことですが、学生も結構喜んで記録づくりをしています。

(6) シンポジウムの開催(上賀茂の文化を語る)

上賀茂は古い地域ですから、色々な伝統行事を引き継いでいます。これらもだんだんと時代の流れで、新しく入ってきた人たちには馴染みの薄いものになりつつあります。地元と一緒に改めて上賀茂の文化を見直すためにシンポジウムを企画しました。今年が最初で、引き続き行いたいと考えています。

ところで、京都市も水に関して何もしていないわけではありません。従来の公共下水道の欠陥を補うために、平成一五年には水共生プランとして、近年頻発する都市型洪水などに対応するために、雨水の貯留・浸透施設の設置などを進めだしました。雨水の流出抑制と有効利用に取り組みだしています。ただ、昔は当然のこととして、雨水の地下浸透をやっておりました。社家にも残されており、今も現役です。昭和一〇年ごろの住宅でも当

り前のことで、側溝に流していたわけではないのです。東京都では、平成二年から湧水の保全事業として浸透マスを使って雨水の地下浸透をやっております。一方、雨水の貯留も行なわれております。これは、御香宮神社の天水桶で、いざというときのために水の備えをやっております。色々な試みが行なわれているのはよい事だと思いません。

水ということで、川の源流も訪ねてみてください。水について改めて感ずるところがあると思います。京都でいえば、鴨川の源流である貴船神社や志明院です。志明院には歌舞伎の十八番「鳴神」に登場する有名な飛龍の滝があります。夏に行けばすばらしい雰囲気味わえます。機会があれば、是非行っていただきたいと思えます。

水について色々お話をいたしました。水のあり様、水の文化は社会の反映だと言えます。言い換えれば、水は社会を映す鏡だと言えます。今日

のこういう機会で水の問題を下水道も含めて考
えていただければ幸いです。

(二〇〇三年七月二〇日)